教育データを学習データに変えるには？ ～「生徒の気づきと学び」を最大化するPJ第22回（2020/9/23）

対話テーマ：教育データを学習データに変えるには？

EBPM（エビデンスに基づいた政策立案）やGIGAスクール構想によって、教育現場におけるデータ活用への期待が広がっています。そこで、今回は教員や生徒にとって望ましいデータの活用法は何かという問題意識のもと、全国の約40名の先生方と対話しました。

「どうすれば経験と勘に基づく学校運営を変えることができるか？」
「膨大なデータの中で教員はどのようにデータに向き合えばよいか？」
「個人ではなく、学校組織としてデータを活用するにはどうすればよいか？」
「生徒自身がデータを活用し、学びに向かうにはどうすればよいか？」

上記のような問いをもとに、気づきの多い対話が行われました。

→

今回のキーワード

「データの民主化」をめざす

生徒が自ら学びに向かうには、教員がデータを使って生徒を管理・指導するだけではなく、生徒自身がデータを使いこなすことが重要である。生徒が自己理解を深めて学習計画を立てたり、教員や保護者と対話することが、これからのデータ活用であり、データの民主化といえるのではないか。

「何を解決したいのか」を明確にする

問題意識が明確であるからこそ、データを活用できる。「何を目的として何が知りたいのか」がないままにデータを集めても、うまく分析・活用できない。

データを共通言語にして、個人の経験と勘を越えていく

「優れた取り組みだが属人的」と言われるものを学校全体の取り組みに変えていくためにもデータは有効である。教員自身がデータは役に立つという手ごたえを持ち、組織の共通言語として使う習慣を持つことが重要である。

- 話題提供　本PJメンバー　上野学園 藤井 亮太朗 –

・データの強みは、「生徒が何を感じてどう成長しているのか」という、これまで教員個人の経験知だったものが言語化/可視化されること
・デジタル化には3つの壁がある。①紙からデジタルへの壁、②個人活用から組織活用への壁、③一方通行から双方向への壁
　①⇒「デジタル化して意味があるのか」という声に対して、できる範囲からデジタル化し、その有用性を感じてもらうことが重要
　②⇒どのタイミングでどんなデータを収集するかを計画的に実施・分析することで、デジタル化されたデータの利用・共有を組織化することが重要
　③⇒教員から生徒への一方通行を脱却し、教員と生徒が一緒にデータを見て検討し、対話することで、生徒が学びに向かえるようになる

- 先生の声 –

・大事なのはデータに対して「生徒がどう思ったか」。結果に対して「どう思う？」「どうしたい？」と投げかけることで生徒は考え、納得感が高まる。（神奈川）
・学びに向かう力については、生徒自身が何をどう評価されたいかのルーブリックを作成し、教員がコーチングすることが理想ではないか。（神奈川）
・先生たちが教科を超えて、データを共有し語ることで、生徒の根っこにある「ものの見方・考え方」が浮き彫りになってくる。（北海道）
・大人たちがデータにどう向き合うかも重要。やりたいことを後押しするだけでなく、客観的にデータを分析し、新しい発見ができるようにしたい。（東京）

「生徒の気づきと学び」を最大化するPJアーカイブはこちらから：https://berd.benesse.jp/publicity/

©生徒の気づきと学びを最大化するプロジェクト